

発行：熊谷市立江南文化財センター

TOPICS

池上遺跡発掘調査報告

市内東部の池上地区では、今年度から道の駅整備事業予定地で発掘調査を実施しています。

現在検出されている遺構は、弥生時代中期中葉(紀元前1世紀)ごろの人々が生活で不要となった土器、食料残滓(食べかすなど)を廃棄した遺構で、土器の多くは池上式土器と呼ばれる弥生土器で、関東におけるこの時代の標式となっている土器です。

また、数多くの柱穴を検出していることから、当時、掘立柱建物が複数棟存在していたことが分かりました。

池上遺跡では、30年以上前に、現在発掘調査している箇所に西接する箇所を調査しており、そこでは竪穴住居が数十軒確認されています。現段階の見解ではありますが、今回の廃棄遺構はこの集落の人々により廃棄されたものではないかと考えています。また、この廃棄遺構は特に重要で、炭化米や植物の種子も見つかっていることから、この中の土を分析することで、当時の食生活や周辺の植生などを把握することが可能になるものと思われます。

今後も池上遺跡の調査は継続して行われますので、新たな成果のお知らせに御期待ください。(腰塚)



発掘調査作業風景



弥生時代中期中葉の廃棄遺構遺物出土状況

源宗寺本堂保存修理事業—仏像の移動—

熊谷市指定有形文化財「木彫大仏坐像(平戸の大ぼとけ)」が安置されている源宗寺本堂は、建物全体における老朽化が進み、仏像の保存にも支障が生じることが懸念されてきました。こうした事態に対応すべく、本市では保存修理委員会を立ち上げ、平成31年初頭から活動を続けてきました。

この度のコロナ禍の影響により一時活動を中断していましたが、令和2年7月に再開し、同11月には仏像仮安置のための仮小屋建築が始まりました。本堂の建替え中、薬師如来と観世音菩薩の2体の仏像は仮小屋にて保管し、一部補強と修理を行います。

そして12月23日、本堂から仮小屋へ仏像の移動が行われました(以下、写真)。本堂や仏像の経年劣化が激しく、本堂の一部解体や仏像の移動は困難を極めました。関係者の皆様のご尽力により無事に仮小屋に安置することができました。今後、1月上旬から中旬にかけて本堂の全解体を行い、2月より新本堂の工事着工に向けて新たなスタートを迎えます。(山川愛)



市内遺跡発掘情報

令和2年度上之土地区画整理地内遺跡の発掘調査について

市内上之では土地区画整理事業を進めるにあたり、事前に発掘調査を行っています。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う緊急事態宣言解除後の6月から実施した前中西遺跡の2地点についてご紹介します。

6月から9月まで実施した調査地点は、遺跡範囲北側の中央付近に位置します。本調査地点では、弥生時代の竪穴住居跡や方形周溝墓、古墳時代以降と思われる掘立柱建物跡や溝跡などが見つかりました。9月から12月まで実施した調査地点は、遺跡範囲北東部に位置します。本調査地点では、弥生時代の竪穴住居跡や溝跡、古墳時代前期の方形周溝墓、古墳時代後期の竪穴住居跡、現況河川である衣川の前身と思われる河川跡が見つかりました。

今回実施した調査では、いずれの地点からも弥生時代の遺構・遺物が多数見つかり、本遺跡の弥生時代が大規模かつ拠点集落であったことをさらに裏付ける成果を得ることができました。(松田)



発掘作業風景

上前原遺跡の発掘調査-縄文時代中期後半の集落遺跡-

令和2年9月、市内千代地区で上前原遺跡の発掘調査を実施しました。今回の調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査で、縄文時代中期後半(今から約5,500年前)の竪穴住居跡1軒と集石土坑1基のほか多数の土器・石器などが見つかりました。竪穴住居跡は、立木の根で大部分が壊されていましたが、炉が残存した状態で確認されました。なお、集石土坑とは土坑内に石を敷き詰め、蒸し焼き調理に使用したものと考えられています。

上前原遺跡は、過去の調査事例から縄文時代中期後半の集落遺跡ですが、今回の調査により、集落の範囲が想定よりもさらに南側に広がっていることが確認できました。(大野)



上前原遺跡の出土状況

野原古墳出土品「男子埴輪頭部破片」の紹介

「踊る埴輪」が出土した「野原古墳」は全長40m程の小規模な前方後円墳です。この古墳は、土取工事のため消滅しましたが、前方部と後方部の石室には金環・勾玉等の装飾品、鉄鏃・鉄刀等の武器が副葬され、墳丘からは武人・馬・巫女・男子等の埴輪が多数出土しています。注目されることは、野原古墳が荒川右岸の江南台地域で整った埴輪祭祀を伴った最初の前方後円墳であることです。小古墳でありながら全身像に造られ甲冑を身に着けた武人埴輪と「男子埴輪頭部破片」(右写真)は古墳に葬られた首長の姿であったかもしれません。(江南行政センターロビーにて令和3年3月末日まで展示)(新井)



連載 くまがやの古墳群

㊼ 摩多利神社古墳-妻沼地域で唯一墳丘が残る古墳-

摩多利神社古墳は、妻沼地区の利根川右岸、妻沼低地の自然堤防上に所在する古墳時代後期に造られたと考えられる古墳です。古墳が立地する自然堤防は、標高約30mを測り、利根川から分かれる旧支流が形成した微高地です。

墳形は円墳であり、規模は直径約30m、高さ約2.5mで、墳頂にはその名とおり摩多利神社の社殿が鎮座し、そのお陰で墳丘が護られ今に伝わっています。この古墳は、未調査であることから埋葬施設は不明ですが、かつて埴輪が出土したとの伝承があることから、およそ6世紀後半と推定されます。

ここから南西約1.5kmには、21基の古墳が確認された5世紀末~7世紀初頭築造の飯塚古墳群が所在し、やはり同じく利根川の旧支流の自然堤防上に立地しています。なお、古墳が所在する場所は字名が大塚であり、この古墳が古くから大きな塚(古墳)が残る地として知られていた証拠ではないでしょうか。(吉野)



摩多利神社が鎮座する墳丘(北から臨む)

◇国登録有形文化財「坂田医院旧診療所」一般公開

埼玉県民の日の11月14日に市内妻沼に所在する国登録有形文化財「坂田医院旧診療所」の一般公開を開催し、県内外から120名の来場がありました。当日は2回の調査報告会のほか、適宜、室内外での解説を行いました。通常では目にすることが少ない建物内部を見学された来場者は写真撮影するなどして自由に時間を過ごされました。また、今回は新たな試みとしてレントゲン室や待合室などをギャラリーに見立て絵画を展示しました。今後も一般公開の機会をお知らせできたらと考えています。(山川愛)



◇第13回地域伝統芸能今昔物語・映像記録会

11月23日、妻沼中央公民館大ホールにおいて、「第13回地域伝統芸能今昔物語・映像記録会」を開催しました。今回は新型コロナウイルス感染拡大対策を踏まえて公演事業を、無観客による、市指定無形民俗文化財保持団体の4団体・一般芸能4団体が出演する映像記録会としました。収録された映像は、記録保存するとともに動画共有サイト「YouTube」での公開配信を随時開始しています。(山下)



◇熊谷ダイナミズム講演会

12月8日、熊谷市荒川公民館ホールで講演会「熊谷ダイナミズム一息づく動の記録」を開催し、約50人が受講しました。埼玉新聞で連載中「熊谷ダイナミズム」の著者が、熊谷地域に息づくスポーツ文化の歴史をテーマに講演し、時代を超えて受け継がれてきた「動」の歴史と、それに関わってきた人間の姿を紹介しました。熊谷から出土した「踊る埴輪」をはじめ棒術や伝統行事、野球、サッカー、水泳など幅広い内容を取り上げました。なお講演は、動画で撮影しインターネットでの配信を予定しています。(山下)



◇備前渠用水「世界かんがい施設遺産」登録記念講座

12月24日、熊谷市太田公民館で歴史講座を開講しました。講座では、妻沼地域を流れる備前渠用水路(びぜんきょようすいろう)の「世界かんがい施設遺産」への登録を記念して、「備前渠用水路と熊谷の土木遺産」をテーマに、伊奈備前守忠次が主導して開削した農業用水路の通称「備前堀」の歴史を解説しました。講座には15人が受講し、その後、公民館の近隣にある同水路脇に建立された石碑「備前渠再興記」の現地見学を行いました。(山川愛)



【文化財探訪 オオカミの御山 三峯】

秩父地方に伝わる伝説では、ヤマトタケルノミコトの東国への進路は知^ち々^ち夫^ぶ国^{くに}に入り、オオカミの案内を受け険路に迷うことはなかったとされます。これを機縁に三峯に東国鎮護の社として三峯神社が造られ、オオカミは神の使いとして現在までも信仰の対象とされています。現在は整備された参道により容易に参拝することができますが、かつての参道は難路だったようです。

この三峯山内には本殿建築のほか多くの建築物があり、熊谷の宮大工であり彫刻師であった飯田和泉の手がけた建築物があります。本殿近くの水屋建物がそれで、「八方にらみ龍」といわれる見事な龍の彫刻を見ることができます。飯田は三峯のほかにも秩父山車屋台を飾る彫刻も手がけており、秩父地方に多くの足跡を残しているようです。なお、三峯信仰には、江戸時代末期、日本でコレラが蔓延した際に、病除けに多くの信仰を集めたとされています。こうした風習は、コロナ禍の世に通じる部分もありそうに感じられました。(新井)



文化財コラム 落とし穴遺構

市域の南縁に位置する小江川地区は比企丘陵に続く北の入り口になります。この丘陵地帯は、谷津が多く動物たちの住処とするに都合の良い環境に恵まれていました。丘陵地の北縁からは、平坦な江南台地の広がり乱流する荒川の先へ、櫛挽台地から続く利根川とその低地を越えて赤城山の麓に至る大パノラマが見渡せます。この風景は縄文人の眺めた景観と基本的には変わらず、江南台地の千代地内西原、萩山、東原、野原地内の宮脇、鹿島などに彼ら縄文人の集落が造られたことが知られています。台地から続く丘陵地は、人と動物たちの生活圏が重なる場所となっていたようです。

小江川地内の西ノ台、新山遺跡では発掘調査により落とし穴と推定される土坑（深い穴）が数基発見されています。土器や石器も少量伴うことから縄文時代の狩場ではないかと考えています。丘陵地から台地へ、捕食や谷津の水場・菟場(ぬた)を目指すシカ・イノシシ・ノウサギなどを狙い掘削された仕掛けで、丘陵斜面に沿って多数並んでいたと考えられます。新山遺跡の落とし穴は、長さ2.3m、深さ1.3mほどで狭く、急な穴の底から這い上がることは困難だったようです。西原遺跡は3,500年以前の比較的大きな村跡で、狩猟のための多数の石鏃、大量の石器クズが住まいの跡から出土しています。彼らは罾を仕掛け、弓矢と勇気を持ってこの地を駆け巡ったようです。(新井)

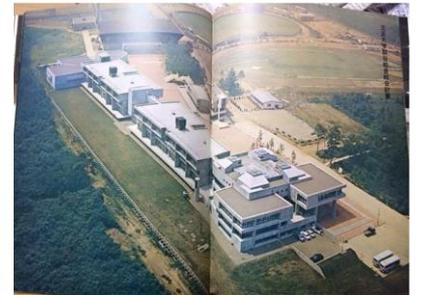


新山遺跡の落とし穴遺構

【マニアックな文化財メモ】

プリツカー賞建築家・槇文彦氏による「立正大学熊谷校舎総合計画」

市内万吉にある立正大学の熊谷キャンパス施設の構造設計を担当したのは、京都国立近代美術館や幕張メッセなどの設計で世界的な名声を博し、建築のノーベル賞とも称される「プリツカー賞」を受賞した建築家の槇文彦氏（1928- ）でした。立正大学熊谷キャンパスは、この槇氏による「立正大学熊谷校舎総合計画」に基づいて、校舎の配置を含めた設計が進められました。その後、キャンパス内の建築物は改築されるなどの変化を経て、当初の計画より増幅された状況が見られますが、耐震のための改修工事の基本的理念においても槇氏の計画が生かされています。著名建築家による建築的遺産が熊谷に存在する意味は、大きいように感じます。今日に引き継がれた点、改築後に新たな形式となった点など、興味深い点は多々ありますが、立正大学熊谷キャンパスに足を運ぶ機会がありましたら、建築物にご注目ください。(山下)



(上掲写真：『現代日本建築家全集 19 槇文彦』「立正大学熊谷校舎総合計画」より)

編集後記

旧年は新型コロナウイルス感染拡大により、人々の生命が危機に晒されるという事態に世界は混乱し、感染拡大と生活全般に対する影響は現在も続いています。文化財に関連した事業においても、夏休みや埼玉県民の日に企画していた行事なども中止となり、地域の伝統行事の多くが中止や縮小せざるを得ない状況となりました。日常生活を彩り、人々の精神的な支えにもなり得る文化財や歴史文化が、新たな生活様式との調和をいかにして果たすべきか、今後も模索が続くように予想されます。

コロナ禍における「不要不急」という捉え方の中で、芸術文化や文化遺産の存在は時として「不急」の場面があるのかも知れませんが、決して「不要」ではないと明言できると思います。

歴史の中で育まれてきた文化財や地域文化が、ウィズコロナの世界で大きな希望や救いとなることを信じて文化財事業を進めていく所存です。エッセンシャルワーカーの皆様への感謝とともに。(山下)



発行：令和3年1月15日（2021/01/15）

熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係）

〒360-0107 熊谷市千代329番地

電話：048-536-5062 FAX：048-536-4575 メール：c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

HP：「熊谷デジタルミュージアム」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

ブログ「熊谷市文化財日記」、熊谷観光・文化財ナビゲーションアプリ「くまここ」更新中